

ものを言えない偶像ではなく

I コリント人への手紙 12 章 1-3 節

はじめに

コリント人への手紙第一は、12-14 章まで「御霊の賜物」について書かれています。

パウロが 1 : 7 で、コリント教会について「あなたがたはどんな賜物にも欠けることがない」と言っている通り、コリント教会は「御霊の賜物」が豊かに与えられている教会だったようです。

では、コリント教会が与えられていた御霊の賜物とは、どんなものだったのでしょうか？それは、12 : 8-10 に書かれています。①知恵のことば、②知識のことば、③信仰、④癒やしの賜物、⑤奇跡を行う力、⑥預言、⑦霊を見分ける力、⑧種々の異言、⑨異言を解き明かす力などです。コリント教会のクリスチャンたちは、このような御霊の賜物が豊かに与えられていたのです。

しかしコリント教会は、このような賜物の豊かさゆえに、二つの問題が起きていました。①それぞれが賜物を自由に用いるので礼拝の秩序が乱れ、礼拝が混乱していたこと、②賜物が豊かに与えられている人は、自分を特別に霊的な存在と思い込み、他の信徒を見下していたこと、です。

特に、「異言」の賜物を与えられている人に、そのような傾向があり、異言によって礼拝の秩序が乱れ、混乱していたようです。「異言」とは、人には理解できない言葉で祈ったり讃美したりすることです。

コリント教会の中には、異言こそ御霊の賜物の中でも最高のもので、霊的な人は誰でも異言を語るべきだと考える人がいたようです。それゆえ、異言の賜物を与えられている人は、エリート意識を持ち、他の信徒を見下し、他の信徒が異言を語ることを求めるようになったのです。礼拝の中でも自由に異言で祈ったり讃美したりする者がいて、礼拝は混乱し、教会の一致や交わりも壊れかけていたのです。

そこでパウロが 12-14 章の中で、御霊の賜物、特に異言の賜物を巡る教会の混乱に対して、具体的なアドバイスをしているのです。

1. 御霊についてまず知るべきこと

今日の聖書箇所は、御霊の賜物に対するパウロの最初のアドバイスが書かれています。そこでパウロがまず初めに語ることは、3 節にあるように、「聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません」ということです。

パウロは 12-14 章にかけて御霊の賜物について語っていきますが、その一番初めに語ることは、聖霊によるのでなければ、誰も「イエスは主です」とは告白できないということです。つまりそれは、聖霊の働きの中で、私たちがまず初めに知っていなければならないことは、聖霊は私たちに信仰を与える方であるということです。

コリント教会はおそらく、聖霊の働きの中でも、異言や癒しや奇跡などの不思議な現象ばかりに目が向けられていたことでしょう。しかしパウロは、それらの聖霊の賜物を語る前に、まず聖霊の働きの中で最も大切な働きについて知ってほしい、それは私たちにイエス様に対する信仰を与えることだと言うのです。

アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、私たち人間は神様との交わりを失い、永遠のいのちを失いました。私たちは生まれながらに霊的に死んだ状態となりました。死人は自分で何もすることはできません。自分の力で信仰を持つこともできません。しかし、いのちの息である聖霊が私たちの心に吹き込まれると、私たちはいのちを得て信仰を持つことができるのです（創世記 2 : 7、ヨハネ 20 : 22）。

私たちが聖霊についてまず知らなければならないことは、聖霊は私たちに信仰を与え、「イエスは主です」と告白させてくださる方であるということです。

ローマ 10 : 9 には、「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと思ふなら、あなたは救われるからです」とあります。「イエスは主です」という信仰告白こそ、私たちの救いに必要な信仰告白です。「イエスは主です」と告白する人は、誰でも救われるのです。「イエスは主です」ということは、イエス様こそまことの神であること、唯一の主なる神様であることを信じることです。イエス様を主なる神様と信じる人は誰でも、神様との交わりを回復し、すべての罪が赦され、永遠の地獄の刑罰から救われるのです。

聖霊は、私たちに信仰を与え、私たちを救ってくださる方です。しかし聖霊は、御言葉を通して私たちに信仰を与えてくれます。ローマ 10 : 17 に、「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです」とある通りです。聖霊は、聖書の御言葉を通して私たちの心に働き、私たちの心に信仰を与えてくださるのです。聖書は、聖霊に動かされた人たちによって書かれた書物です。聖霊は、御自身の御業である聖書を通して私たちの心に信仰を与え、私たちを救ってくださるのです。

私たちの救いは、全く神様の恵みによるものです。私たちは霊的に死んでいて、自分の力で信じることも救うこともできませんでした。しかし父なる神様がイエス様を遣わし、イエス様が十字架に架かって復活し、聖霊が聖書を通して私たちにイエス様に対する信仰を与えてくださったことによって、私たちは救われたのです。私たちは誰ひとり自分の力

で救いを勝ち取った人はいません。私たちは皆、神様の恵みによって救われたのです。

私たちは、異言や癒しや奇跡などの不思議な現象ばかりに心が奪われて、聖霊の最も大切な働きである、私たちに聖書を与え、私たちの心に信仰を与える働きを見失ってはなりません。霊的に死んでいた私たちに信仰が与えられ、救われたということこそ、最大の奇跡なのです。

3. ものを言えない偶像ではなく

パウロが今日の聖書箇所でもう一つ語っていることは、2節の「あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところに引かれて行きました」ということです。コリントの町は偶像礼拝が盛んに行われている町でしたので、コリント教会の中には、以前偶像礼拝をしていた人たちも多くいたようです。

この世界に真の神様はただひとりしかおられません。それは三位一体の主なる神様です。それ以外の神々はすべて偽りの神であり、偶像です。

偶像の神の特徴は、「ものを言えない」ということです。偶像の神は語らないのです。語らないゆえに、その信者たちが語るのです。偶像の神との交わりは、一方通行です。信者が偶像の神に祈りを捧げるだけです。そのため、信者たちは同じ言葉で長い祈りをするのです。イエス様も言われました。「祈るとき、異邦人のように、同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれると思っているのです」(マタイ6:7)。同じ言葉で長い祈りをすれば、偶像の神が祈りを聞いてくれると信じているのです。旧約時代のバアルの神の信者たちも、偶像の神の前で大声で叫び、踊り回って、偶像の神を動かそうとしましたが、何も語らず、何も起こりませんでした。

コリント教会の中には、以前していた偶像礼拝のように、主なる神様にも一方的に祈る人たちがいたようです。それが異言となって現れていたようです。

しかし私たちが信じている三位一体の主なる神様は、ものを言えない神様ではありません。むしろ人格を持った語る神様です。そしてその神様は、聖書を通して今もなお私たちに語りかけておられます。

ものを言えない偶像を信じる人は、自分が一方的に語り祈るほかありません。しかし人格を持ち、私たちに語りかける三位一体の主なる神様を信じる私たちは、神様の語りかけを聞かなければなりません。聖書を通して神様の語りかけを聞かなければなりません。私たちが三位一体の主なる神様との交わりは、一方通行ではありません。私たちは、神様の御言葉に耳を傾け、それに応答して祈りを捧げるのです。

私たちの信仰生活にとって祈りは大切なものです。しかし私たちが信じる三位一体の主なる神様は、聖書を通して私たちに語りかける方です。私たちは、自分の祈りの言葉にか

き消されて、神様の言葉が聞こえなくなるようではいけません。自分の祈りの言葉が大きくなるあまり、神様の言葉が聞こえなくなるようではいけません。

私たちが信じている主なる三位一体の神様は、ものを言えない神ではありません。私たちに語りかけ、御自身の御心を語っておられる方です。私たちはまず神様の御言葉の前に静まることが大切です。旧約聖書のサムエルのように、「お話してください。しもべは聞いております」(Iサムエル 3:10)という姿勢が大切です。そして神様が御言葉の中で語られた祈りのあり方、神様が喜ばれる祈りを通して、神様に語りかけていくことが大切なのです。

おわりに

私たちが信じる三位一体の主なる神様は、私たちを恵みによって救ってくださった方です。私たちを愛し、私たちに信仰を与え、私たちを救ってくださいました。

しかしその信仰は、聖書の御言葉を通して与えられるものでした。主なる神様は、私たちに聖書を通して語りかけておられます。私たちは神様との交わりを回復し、神様との交わりに生きる者です。しかしそれは決して一方的なものではありません。私たちだけが語るものではありませんし、神様だけが語るものでもありません。私たちは御言葉を通して語られる神様からの語りかけに熱心に耳を傾け、その語りかけに応答して熱心に祈り、讃美を捧げるのです。私たちは、聞くだけの者であってはならないし、語るだけの者であってもならないのです。私たちは聞き、語ることによって神様との交わりを深めていくのです。